慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	シルヴァン・ムナン氏講演：「ヴォルテールとルソーの相互的関係」
Sub Title	Sylvain Menant : Les Influences réciproques de Voltaire et de Rousseau
Author	井上, 櫻子(Inoue, Sakurako)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2018
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. フランス語フランス文学 (Revue de Hiyoshi. Langue et littérature françaises). No.66 (2018. 3) ,p.35- 52
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20180331-0035

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

シルヴァン・ムナン氏講演
「ヴォルテールとルソーの相互的関係」

この数十年間、私の研究の一部は、文学史における「連続性」とでも呼ぶものに捧げられてきました。これは、作品を孤立状態から引き離し、同時代の文学創造全体と関連づけるものです。こうした方法の基盤となる発想は以下の通りです。個人の独自性はいかなるものであれ、作家は自らの作品を、その直前、あるいは同時代に活躍した他の作家の作品が含まれる文脈の中に組み込もうとしているということです。文学創造は、たいていの場合はっきりとは示されないとはいえ、作家間の対話の中に組み込まれています。そしてこの対話は、繰り返しや模倣、反論、書き換え、そして時にはパスティーシュ（文体模写）やパロディーから成っています。現代の文学史研究者の仕事は、こうした隠された関係性を明らかにすることにあります。もちろんこのような作業は、すでに着手されています。かつては典拠研究、流派、すなわち文学グループや文学運動についての研究があり、例えば小説のテーマ研究や定期刊行物の世界の調査とともに発達しました。定期刊行物は、とりわけ 18 世紀にあてはまりますが、ジャン＝ポール・サルトルやナタリー・サロートの時代においてもなお、文学の素材が入り混じり、文学場のひそやかな緊張関係が生じる特権的な場の一つだったのです。したがって、フランス文学ひとまとまり、すなわち、作品を互いに緊密に結びつける「連続性」に注目する場合は、ある意味では当たり前のことを述べているに過ぎません。けれども、ヴォルテールとルソーのように、激しい対立関係にあった人物が、互いに他に負うている可能性のある点について分析する場合は、当たり前のことではなくなります。この 2 人の作家がどれほど激しく敵対していたかは、よく知られています。ここで思い出されるのは、1760 年、ルソーがヴォルテールに宛てて書いた手紙です。「あなたのことなどまったく好きではありません。（中略）憎んでいるのです。結局のところ、あなたがそう望んだの

ですよ」(D8986)。また、ヴォルテールのコメントも思い出されます。「ルソーが完全な馬鹿でないことを願っていたのだが、そうだったようです」(D9006)。そして、この確執がどれほど深刻であったかということもよく知られています。ルソーは素朴な生活への回帰を熱心に宣伝し、民主主義を擁護し、演劇を激しく非難しました。ヴォルテールは経済の発展、奢侈「そして惰弱ささえも」[井上注：ヴォルテールの詩「俗世人」からの引用] 賞賛し、中央集権化された君主制を推奨し、さらに、民衆教化のための演劇について論じた人物です。ルソーは散文家としての才能の上に栄光を確立しました。一方、ヴォルテールは同時代人にとって、まず第一に飛び抜けて優れた「現代の詩人」でした。ルソーは作家の孤独を体現した人物ですが、ヴォルテールは社交性の権化そのものといった人物です。ルソーは人間の本来の平等性を懐かしみ、ヴォルテールは偉人や、競争心、富の蓄積を賞賛し、貧しきものの苦しみを慰めました。

個人的対立がきわめて強かったとはいえ、ヴォルテールも、ルソーも文学創造を大いにはぐくむこうした対話から免れているわけではありません。ルソーはヴォルテールに、そしてヴォルテールはルソーに、負うているところがあるのです。そのことをいくつかの例を通して明らかにしたいと思います。2 世紀以上にわたって教師や学生がこの 2 人の作家に対して行ってきた比較対照作業は、彼らの相違点を強調するものでした。しかし、逆説的にもヴォルテールがルソーに霊感を与えたこと、そしてルソーがヴォルテールに霊感を与えたことも事実なのです。この点について以下、明らかにしたいと思います。

Ⅰ．ルソーの作品におけるヴォルテールの影響

いまだ無名のルソーが文学者としての道を進み始めた頃、彼より 18 歳年上のヴォルテールはすでにしておそらくヨーロッパで最も著名な作家でした。ルソーの世代全体に対するヴォルテールの影響力は相当なものでした。ルソー自身、駆け出しの頃からさまざまなヴォルテールの作品に非常に注目していたと証言しています。彼は「ヴォルテールの書くものは何一つとして、

見逃すことはなかった」と『告白』に記しています。レーモン・トゥルッソン［井上注：ベルギー出身の 18 世紀研究の大家］が強調しているとおり、ルソーはヴァランス夫人と過ごした時期に、『哲学書簡』、『ラ・アンリアッド』、プロイセン王フリードリヒ 2 世とヴォルテールの書簡を読んでいました。1737 年、彼はグルノーブルで悲劇『アルツィラ』の上演に立ち会い、「息がつけないほど感動」[1] したと言います。そして、1745 年、ヴォルテールに次のように書き送っています。「この 15 年来、あなたのお眼鏡にかなうように精進しております。」[2] こうした発言だけで、ヴォルテールがルソーにとって文学界における模範であったと知るのに十分です。ルソーはその師が支配的地位を占めていたジャンル、とりわけ韻文というジャンルにおいて自らの能力を問うてみました。ルソーの最も有名な韻文作品である『シャルメットの果樹園』にはこうした類の作品であることの証、すなわち詩人ヴォルテールに対するオマージュが記されています。というのもここで、詩人は「感動的なヴォルテール」と称されているからです。ルソーはまた演劇というジャンルにおいても力試しをしました。ヴォルテールの悲劇『アルツィラ』を一幕にし、『ラミロの祝祭』というタイトルを付された翻案ものは、まさにその好例です。さらにまた『新世界発見』（1740 年頃）と題された悲劇も『アルツィラ』から着想を得たものです。つまり、ルソーはヴォルテールのキャリアに示されるような作家の人格を理想としていたのです。ルソーはヴォルテールのように偉人と書簡をかわそう、ヴォルテールのように舞台作品で名声を得よう、ヴォルテールのようにその論考において歴史哲学、人間論、社会哲学、幸福論を示そうと考えたのです。ヴォルテールの『人間についての韻文論考』は 1738 年から 1742 年にかけて刊行されます。この論考は、近代哲学によって提起されたさまざまな問題を一通り検討した一貫性のある壮大な作品です。この韻文論考のように、ほどなくしてルソーが執筆した 2 つの散文論考は、格調高く雄弁で、文彩や驚くべき表現に溢れてい

1）Jean-Jacques Rousseau, *Correspondance complète*, éd. Ralph A. Leigh, Genève, Banbury, Oxford, 1963, lettre 15.

2）*Ibid.*, lettre 139, 11 décembre 1745.

ます。韻文論考におけるヴォルテールがそうであるように、散文論考におけるルソーは時代を代表する思想家を自任しているのです。

諍いと、当然のことながらそれにともなう立場の硬化が始まったのは、1760 年、さきほど引用した、常軌を逸したルソーの手紙（「あなたのことなどまったく好きではありません」という手紙）をヴォルテールが読んで仰天してからのことです。それまでは 2 人の作家の関係、長老と若者の関係はまずまずのもの、いや良好でさえあったのです。つまり、ヴォルテールが駆け出しの作家たち皆と築いていた関係と同じようだったのです。ヴォルテールはこうした作家たちに対しては進んで寛容な態度を示し、庇護者として振る舞っていました。作家たちが思想界と縁がある場合は特にそうでした[3)]。ルソーが『百科全書』の執筆協力者の一人であり、この大企画の主導者であったディドロの大親友であったこと、そしてもう一人の主導者であったダランベールがヴォルテールと熱心に文通し、フェルネー［井上注：ヴォルテールが居を構えていたスイスの一都市］に招かれていたことをここで再び指摘する必要はないでしょう。ディジョンのアカデミーのコンクールに応じてルソーが執筆した 2 本の論考、すなわち『学問芸術論』（1751 年）と『人間不平等起源論』（1755 年）――ここでルソーはヴォルテールとは大きく異なる独自の思想体系を展開しています――の出版後でさえ、2 人の交流は礼節にかなったもので、ヴォルテールはルソーの態度をまだ駆け出しの作家が目立つために独自性を追求しているのだと解釈しただけでした。ルソーの方は、ヴォルテールに敬意を表していましたが、それは「われわれ皆が首長としてのあなたに表すべき敬意」[4)] だと 1755 年に書き記しています。

3）こうした問題とヴォルテールとルソーの関係性の全体像については、以下の論考を参照のこと。*Voltaire et son temps*, sous la direction de René Pomeau, Oxford et Paris, Voltaire Foundation et Fayard, 1995, t. II, pp. 134–148, et Henri Gouhier, *Rousseau et Voltaire, portraits dans un miroir*, Paris, Vrin, 1983.

4）Jean-Jacques Rousseau, *Correspondance complète*, éd. cit., lettre 319.

ルソーに対するヴォルテールの知的影響は、ジュネーヴ市民［井上注：ルソーのこと］が啓示宗教を疑問視し、キリスト教を批判的検討に付す際の方法にはっきりと現れています。ルソーの知的遍歴は、「サヴォワの助任司祭の信仰告白」という『エミール』第4巻の長い展開部にはっきりと読み取ることができます。ご承知のとおり、この助任司祭はきわめて独自の信念を持った聖職者で、イエスの教えを支持するに至るまでにキリスト教の教義を拒絶するあらゆる理由を延々と示します。このきわめて内容の濃い箇所に、ルソーは宗教改革以来、そしてとりわけ18世紀最初の数十年に強靭な精神の持ち主たちが展開した反キリスト教の議論を整然と、そしてクリアにまとめることに成功しています。18世紀前半において、こうしたすべての批判的思想を広めたのはヴォルテールだけというわけではありませんでした。とはいえ、彼が最もよく知られ、最も感化力を持っていたのは間違いありません。ご存知のように、反キリスト教プロパガンダが展開された彼の傑作は、1760年代から1770年代のもので、ルソーに影響を与えるにしては出版時期が遅すぎます。しかし、18世紀初頭、先に引用したルソー自身の言葉によれば「ヴォルテールの書くものは何一つとして、見逃すことはなかった」という時期に、すでに（ヴォルテールの）重要なテクストは十分ありました。若き日のルソーが『哲学書簡』を読んでいたことは先に確認したとおりです。クェーカー教徒についての書簡、ロックについての書簡12、「パスカル氏の『パンセ』について」と題された書簡25は啓示宗教に対する武器庫となっていますが、これはまた同時にキリスト教を基盤としたものでもあります。ルソーが賞賛するヴォルテールの悲劇――とりわけ、キリスト教徒の偏見と、イスラム教徒の偏見を対置した『ザイール』（1732年）とイスラム教のペテンといううわべのもとに、キリスト教の狂信に対する批判を展開している『マホメット』（1741年）――もまた彼に多くの考える材料を与えました。

かなり前からヴォルテールと呼ばれていた［井上注：ヴォルテールは本名ではなく、筆名のようなものである］『ラ・アンリアード』の作者の他の作品もまた、ルソーがまだ駆け出しで、無名であった時代に、同じ方向性にあ

りました。まず『ラ・アンリアード』ですが、この作品については最初のタイトルが『旧教同盟』であり、その主題が宗教派閥の狂信の暴力性にあると浮き彫りにするものであったことはよく知られています。『ウーラニアーへの書簡詩』という標題のもとに知られる有名な詩は、はるかにラディカルに、そしてあからさまに大胆なメッセージを伝えています。美しい婦人に信仰心よりも色事を選ぼうと決心させるべく、ヴォルテールは彼女がキリスト教の真実を疑うようさしむけるのです。2つの聖書は「架空の歴史」を形成しているというのです。

あなたの開明された精神は2つの聖書が
架空の歴史だと思ったことはないのですか。

印刷物にするにはあまりにも大胆すぎたため、この詩は1716年から草稿の形で広まりましたが、かなり有名になりましたのでパリで思想家たちの集団と付き合いのあった若き日のルソーの目に留まらなかったはずはありません。もう一つ、ルソーの宗教思想の発展に大きく寄与したヴォルテールの作品の例を挙げましょう。それは、『狂信についてのオード』、ヴォルテールが『迷信についてのオード』あるいは『エミリーへのオード』とも呼んでいる作品です。この作品は1738年にはアムステル版『ヴォルテール作品集』に掲載されました。オードというおごそかできわめて入念に練られた構造のジャンルを選んでいることが、伝えようとするメッセージの重要性を浮き彫りにしています。宗教の批判的考察、不寛容から生じる影響に対する非難、理神論と自然道徳の定義と、このオードにはヴォルテールが彼の同時代人とルソーの世代のような新しい世代の人々に提示する宗教哲学のさまざまな主題が凝縮されているのです。

啓示宗教のペテンという発想に対置されるのは、哲学者の宗教という理想です。この哲学者の宗教の内容をめぐって激しく対立する前に、ルソーはヴォルテールの後継者として思考します。ヴォルテールの作品の読書経験は、

自ら文学者としての道を進む前からルソーに多大な影響を与えました。このようにヴォルテールはルソーと同じ世代の多くの作家に影響を与えました。というのも、ヴォルテールは現代作家の模範であり、その作品の中に当時の人々の望みを要約していたからです。作家としての計画、啓示宗教に対する批判的態度、当時のヨーロッパ社会において思考の指導者たらんとする野心、知のさまざまな分野に対する見解、こうしたものすべてがルソーにおいてはヴォルテール的だったのです。たとえ、こうした野心の一致が激しい対立へと導くことになるとしても。

Ⅱ．ヴォルテールの作品に対するルソーの影響

1760 年までは、相互の敬意によってヴォルテールが若い仲間［井上注：ルソーのこと］の考え方や文学的実践に関心を向けるのを妨げるものは実質上ありませんでした。長きにわたってパリから離れていたヴォルテールは、文学界を貫く流行に合わせようと気にかけていました。成功への欲望は、ヴォルテールのような劇作家においては非常に強かったので、彼は他人の成功を注意深く見守っていました。そのことは、彼の書簡や蔵書カタログが大いに物語っています。ところで、ルソーの 2 つの論文は大変なうわさになり、論争を引き起こし、書店ではまさにベストセラーとなりました。そして、おそらくは 18 世紀に最もよく読まれた小説である『新エロイーズ』の成功ははるかに絶大なものでした。さらに、『エミール』も注目も集めましたが、それはこの書物が惹起したスキャンダルだけに起因するものではありませんでした。ヴォルテールはこうしたルソーの主要作品を激しく批判しました。しかし、これらの作品が人々の注目を集め、フェルネーの亡命者［井上注：ヴォルテールのこと］がそれを興味深く見守っていたことを考慮に入れると、ルソーの作品がヴォルテールの創造行為にどのような影響を与えていたか調査しないわけにはいきません。まず、ヴォルテールは、ルソーの作品の中で彼から見ればまずいと思われる箇所に不満を抱き、そうした箇所を自分流に書き直しました。こうした［ある作家から受ける］直接の影響は、古くから文学創造の大きな源泉の一つです。そして、ルソーの立場は、この若い仲

間の考えや書き方に異を唱えるテクストにおいて、彼とは反対の立場を取りたいという欲望をヴォルテールのうちに掻き立てることになりました。ですから、ルソーの華々しい成功によって、ヴォルテールの文学に対する考え方が変化してはいないかと問うことは可能でしょう。

ルソーの傑作小説『新エロイーズ』に対するヴォルテールの評価は厳しいものでした。彼の批判の対象となった箇所の一つに、第 2 部書簡 26 が挙げられます[5)]。サン = プルーのパリ旅行のエピソードの一つです。快楽の都において若い異邦人の旅人が出会う誘惑は、当時の小説におなじみの事件でした。その例にもれず、ヴォルテールも 1758 年の『カンディード』第 1 稿においてパリを訪れた主人公をあまり感心できない女性の術策に直面させます。カンディードは、年老いた女衒によってその女性のもとに連れて行かれるのですが、女性は姿を見せずに自分はキュネゴンドだと言い張っているのです[6)]。ルソーの小説において、サン = プルーは罠にはまります。付き合いのあった将校たちに貴族のサロンだと信じ込まされ、高級娼婦宿に連れて行かれるのです。娼婦宿の女主人は、貴族の館の女主人の役を演じ、娼婦たちは招待客の役を演じます。サン = プルーは会合の際の夕食で酒を飲み過ぎてしまいます。目をさますと、なぜか寝室にいて、起こった出来事を自覚することなく、ジュリを裏切っているのです。書簡体小説の法則に従って、われわれはこの不幸な出来事をサン = プルー自身がジュリに宛てた後悔を悲しみに満ちた手紙の中で、彼自身の口を通して知ります。この一節は、小説の中で最もよくできた箇所というわけではありません。小説の主人公は、恋愛と情念の世界から、罠と猥雑な快楽溢れるピカレスク小説の世界へと転落し、人々をがっかりさせるのですから。ルソーは調子の統一性を破るという罪を犯しています。このエピソードを別な形で書くことはできたでしょうか。も

5）Rousseau, *Julie ou La Nouvelle Héloïse*, éd. de H. Coulet, Paris, Gallimard, coll. « Folio », 1993, t. I, pp. 357–360.

6）Voltaire, *Contes en vers et en prose*, éd. S. Menant, Paris, Bordas, coll. « Classiques Garnier », t. I, 1992, p. 288.

ちろんできました。主人公と距離を置くことができたなら――ただし、書簡体小説、そして主人公自身が書く書簡では不可能です。また、パリの社会をその細部に至るまで知っていたなら――ただし、パリにあまりなじんでいないあわれなスイス人には、それは不可能でした。正真正銘のパリっ子で大作家であったヴォルテールは、すぐさま自らの優位性を示すべく、1761 年の『カンディード』再版に際して、主人公が初めてパリを知ることになる章の一部を書き換えました。1758 年のオリジナル版では、尻軽女は寝室へ、そして自分のベッドへとカンディードをおびき寄せます。しかし、彼は女の姿を見ることはできません。カーテンが閉じられているからです。「光が当たると死んでしまう」[7] と言うのです。彼が見ることができるのは、旅人［井上注：カンディード］がもたらした高価なプレゼントをつかまえる手だけなのです。ヴォルテールがこのエピソードを展開した際、ジュネーヴ市民が考えついた演出――ヴォルテールはそのやり方をまずいと考えたのですが――から着想を得たのは明らかです。この書き直し作業において、ヴォルテールは、カンディードをパリじゅう案内してくれる日の浅い友人いわく「貴婦人の家」への主人公の招待という主題を繰り返しています。しかし、［ヴォルテールの小説では］よりもっともらしさを出すために、この女性は自宅でひそかに売春をおこなっているだけでなく、もぐりで賭博場を開いていることになっています。夕食をとるまえに、人々は賭け事をし、勝ったり、負けたり――負けることが多いのですが――するのです。サン＝プルーの手紙の中で多く紙面を割かれているものの一つに、食卓での会話がありますが、娼婦と将校の会話など、面白くないはずです。ヴォルテールによる書き換え版では、食卓についた賭博者の存在が、文学や思想関連の話題をめぐるさまざまなやりとりを書き込むことを可能にしています。そして、そのおかげでパリの食卓における会話の見事な描写が完成されているのです（とはいえ、ヴォルテールは 10 年以上もこの街に足を踏み入れていないのですが）。「夕食は、パリにおけるほとんどの夕食と同じようなものでした。まずは静寂、そして、

7）*Candide*, éd., cit., p. 288.

まったくはっきり聞き取れないようなうるさいおしゃべり、ついで、冗談——そのほとんどはつまらないものです——、誤ったニュース、下手な議論、ほんの少しの政治議論とたくさんの悪口が続くのです。」[8] ルソーの描く夕食の光景ははるかに簡素なものです。「会話は心がこもっておらず、みだらで、女性たちは乱れた服装で挑発しようとしていました。」[9] ヴォルテールはとりわけこの色恋沙汰（アヴァンチュール）＝冒険の結末において、サン＝プルーの羞恥心に満ちた言い落としを、語り手のエスプリに満ちた明るさで置き換えています。この語り手においては、安易な快楽の道徳的断罪は、利益が世界を主導するという穏やかな確認に置き換わっているのです。「その美女は、若い異邦人の両手に２つの大きなダイヤモンドを認めると、まったく本当に心から褒めたので、ダイヤモンドはカンディードの指から侯爵夫人の指へと渡ってしまいました。」[10] けれども、最も面白い変容はヴォルテールが大団円の前に織り込んでいる喜劇的場面に認められます。サン＝プルーを敗北に追いやった女性は、顔や声を持たない人物であるのに対して、ヴォルテールの偽侯爵夫人は微笑み、話しかけます。そしてカンディードの方は、ルソーが描くような不器用な青年ではありません。カンディードは騙され、盗みに遭いはしますが、滑稽な人物になることからは免れています。なぜなら、快楽に引き寄せられつつも、カンディードは人々が彼に演じさせようとする役割を超越した立場にいるからです。

> 「それでは」と彼女は言いました。「あなたは今でもキュネゴンド・ド・トゥンダー＝テン＝トロンク嬢を身を焦がさんばかりに愛しているのですね。」「ええそうですとも」と、カンディードは答えました。侯爵夫人は優しい笑みをたたえながら言いました。「ウェストファリアの若者のような答え方をなさるのですね。フランス人なら、こう言うでしょう。『確かに、キュネゴンド嬢を愛しています。けれども、あなたを目の前

8）*Ibid.*, pp. 318–319.
9）*La Nouvelle Héloïse*, éd. cit., p. 359.
10）*Candide*, éd. cit., p. 320.

にすると、もうあの方のことなど愛していないのではないかと思ってしまうのです。』」「なんですって！」とカンディードは言いました。「僕だって、あなたのお望みになるように答えますよ」侯爵夫人は言いました。「あの方に対するあなたの想いは、あの方のハンカチを拾ったときに始まったのです。わたしはあなたに、靴下止めを拾って欲しいのです。」「喜んで」とカンディードは言い、彼女の靴下止めを拾いました。ご婦人は言いました。「でも、わたしはあなたにそれを付け直して欲しいのです。」カンディードはそれを付け直してあげました[11)]。

1761年の注意深い読者は、『カンディード』の改訂版に、ヴォルテールが感傷的で教訓的な小説に対する拒絶、ルソーが提唱するようなキリスト教的精神にかなう誠実さと節制の道徳の拒絶を掲げていると見抜いたことでしょう。しかしここで指摘しておきたいのは、『新エロイーズ』の一節が『カンディード』の決定稿の一節の着想を与えたということです。

ヴォルテールに対するルソーの影響について、もう一つの例を見てみましょう。教育の諸問題に対する関心です。1760年代初頭において、教育問題について本を著したのはルソーだけではありませんでした。というのも当時、前代未聞の事件が起こったのです。パリの高等法院でイエズス会に対する訴訟が起こったのですが、イエズス会の解散に先立ち、2世紀近くにわたって教育の模範となってきた200校のコレージュ［井上注：イエズス会の学院］が閉鎖に追いやられたのです。新しい教育内容、教育方法についての議論が活発に行われ、数々の著作が誕生しました。しかしながら、人々の関心を惹き、最も人気を集めたのは1762年に刊行されたルソーの大著、『エミールあるいは教育論』なのです。小説の体裁をなすこの論考の中には、ヴォルテールに直接着想を与えたところが一箇所あります。それは、ヴォルテール自身の作品に影響を受けたものとして先に引き合いに出した「サヴォ

11）*Ibid.*, p. 320.

ワの助任司祭の信仰告白」です。ヴォルテールはこれを読んで大変熱狂しました。「信仰告白」は、『エミール』の他の部分に認められるまずい点をすべて清算してくれるように映ったのです。彼はこの見事な総括を、当時準備中で 1764 年に刊行されることになる『哲学辞典』で取り上げます。そして 1763 年、『オネットムのカテキズム（教理問答）』――お察しのとおり、これは反カテキズムです――を刊行した際、明らかにルソーとわかるイニシャル DJJRCDCDG（Dom Jean-Jacques Rousseau ci-devant citoyen de Genève 旧ジュネーヴ市民ジャン＝ジャック・ルソー）を用いさえしたのです。ルソー作としたのは彼を再び困らせようという悪意あってのことでしたが、また同時にキリスト教の教義批判の着想を与えてくれた人物への皮肉のこもったオマージュでもあったのです。ヴォルテールは、晩年制作した数々の雑録集の一つ『必須論集』（1766 年）に「信仰告白」を再録すらしています [12)]。

さらに、『エミール』の読書経験は、ヴォルテールが教育問題――それまで彼の作品にほとんど登場することのなかった問題です――についての考えを明確にするきっかけとなりました。そして、確かにルソーが提示した教養小説についての考察から、有用性と心地よさを融合させて、悪しき慣習が批判されると同時に、人を惹きつけるような優れた教育例が示された物語を自分なりに書いてみようと思い立ちました。『エミール』が出版される以前、1758 年版の『カンディード』では、主人公の教育について真剣に、そして長々と論じられることはありません。カンディードの受ける教育は滑稽な哲学教育あるいは偶発的な感情教育も同然です――それでもなお、教養小説に分類できますが。これに対して、1762 年、『エミール』を読んだ後のヴォルテールにとって、教育は、大幅な紙面を割いて議論、解説すべき物語の主要テーマとなります。1763 年末に執筆され、1764 年に刊行されたコント集『ギヨーム・ヴァデのコント』には、このたぐいのテクストがいくつも含まれま

12）この点については、レーモン・トゥルッソンの総括を参照のこと。L’article « Rousseau » du *Dictionnaire général de Voltaire*, Raymond Trousson et Jeroom Vercruysse éd., Paris, Champion, 2003, p. 1074.

す。これらのテクストには簡潔であるという共通点があります。それはあたかもルソーの教養小説の長さ――ヴォルテールはこれをやりきれない、「4巻からなる愚かな乳母の戯言の寄せ集め」[13]、「愚にもつかぬおしゃべり」[14] だとみなしました――に対する反論であるかのように映ります。そしてこうしたコントのいくつかについて、最も簡潔になりうる形式、すなわち韻文という形式を選びさえしたのです。かくして若き日以来、ほとんど手をつけたことのなかったジャンル、すなわち韻文コントに立ち戻ることになったのです。彼は2つのコントについて韻文で執筆するという選択をしましたが、それらの作品に『女子教育』、『王子教育』という対をなすタイトルが付せられているのは大きな意味を持ちます。この2つの物語は一見したところ大きく異なっているように見えます。前者では、表面的には信心に凝り固まっているように映る母親によって、ある良家の娘が家庭内で厳格なキリスト教の道徳的規範のもとに置かれているのですが、彼女の母親は実は秘密の愛人の与えてくれる快楽を密かに楽しんでいます。娘は母親の素行を知り、自分も恋人を作ります。母親はこうした二重のたわむれは根拠のないものだと認めます。それ以来、娘の教育は自由で洗練された人々との付き合いによって補われるようになります。

ジェルトゥルード［母親］はずっと家に呼んだ
甘美な楽しみ、愛の仲間を。
最も誠実な人々はそこで人生を過ごした。
好ましい仲間といれば、嫌なことなど決してない[15]。

このコントは、キリスト教の教育批判であるのみならず、ルソーの方法に対する批判的返答でもありました。というのも、ルソーはエミールを人里離れ

13）14 juin 1762 à d'Alembert.
14）Voltaire, *Questions sur l'*Encyclopédie, « Assassinat », *OC*, vol. 39, p. 136.
15）Voltaire, *Contes en vers et en prose*, éd. S. Menant, Paris, Classiques Garnier, 1992, t. I, p. 357.

た田舎の領地にたった一人の教師とともに長らく閉じ込めてから、心の準備ができていない彼を雑然とした世界に投げ込むのですが、それではあまりにも遅すぎます。『王子教育』も似たような話です。ある東洋の王子が現実界と遠く離れたところで、信心深い教師に育てられます。しかし、海賊の侵略によってまったく新たな状況が生まれます。正真正銘の革命です。王子はラバ引きとなって現実の世界を初めて知ります。そして美しいアミード――新たなスルタンはしきりに彼女を自分のものにしようとします――との出会いから、王子は自分に有利なように政治状況を立て直す力を得るのです。主人公を導くのは、自然な情念、つまり愛であって、『エミール』のように教師ではないのです。なるほど、『エミール』におけるのと同様、王子の教育は卑俗な現実との出会いにもとづいています。王子はラバ引きとなりますが、エミールも大工になります。しかし首長としての天職、王子としての立場を見出すまでの回り道は束の間のものでしかありませんでした。ヴォルテールは、教育は若者の社会的地位によって同じであってはならないと確信していました。その出自次第で、若者たち皆が社会において同じ役割を果たす運命にあるわけではないからです。ほぼ同時期に執筆されたもう一つのコント『アゾランあるいは聖職禄所有者』[16] ――これもやはり韻文で短い作品（2ページ）です――において、再び教育という主題を扱っています。ただコーランを読むことによってのみ教育されてきた一人の若いイスラム教徒は快適な聖職者としての道を約束されますが、この道を進めば、独身でいることを結果的にともないます。美しいアミーヌとの出会いは彼に考えを改めさせます。

さらばメッカよ、さらばメディナよ、
さらばむなしい名誉の輝きよ、
こうしたあらゆる仰々しい束縛よ。
わが心はただアミーナだけのもの。

16）*Ibid.*, pp. 401–402.

わが村で楽しく生きよう[17]。

同じ『ギヨーム・ヴァデのコント』の中にはこれまで取り上げてきたコントよりも知名度の高いコント――このコント集のなかで最初の散文です――があります。それは、『ジャノとコラン』です。このコントには似たような出自の2人の幼なじみの教育が並行して語られていることを思い出しましょう。一人はジャノで、体裁だけを気にする教師に堕落させられます。この教師はジャノを役立たずにし、ジャノは両親の破産によって無一文で残されてしまいます。もう一人のコランは、有能な仲買業者としての職を学んで金持ちになります。「おれは優れた錫引き鉄と銅の製造を率いる立場にいるのさ。」[18] 彼はまた、善行の徳と同時に家族の徳を示しています。教育史の誕生によって、ヴォルテールは自然（本性）と教育の関係についての考察し始めるに至ったのですが、この点については彼とルソーには類似点があります。ジャノが堕落させられたのは社会のせいです。ですから、彼は自然の善性を見出すこともできます。コントの末尾にはこうあります。「コランの善良な魂はジャノの心に本然の善性の芽を育みました。世間はこの善性の芽をまだ完全に踏み潰してはいなかったのです。」[19] コランの徳は、彼を一種の模範にしています。しかしそれはひとえに彼が属している社会的カテゴリーに対しての模範なのです。ヴォルテールは、ルソーが提唱するような教育のユートピア、富裕な貴族を大工に変えるのを理想と示す教育のユートピアを拒絶する態度は忠実に守っています。ルソーは自らの教育論に対する応答を促しつつヴォルテールに着想を与えていますが、文学的次元においても、教育的物語の進むべき道を示すことで影響を与えているのです。ここで読者ヴォルテールが教育問題に一層関心を寄せているのは、こうした問題が魅力的な登場人物に具現化されており、その結果が劇的事件の起こる瞬間に示されているからです。

17）*Ibid.*, p. 402.
18）*Ibid.*, t. II, p. 34.
19）*Ibid.*, p. 35.

それではより大きな問題として、若い仲間にして若いライヴァルとなった人物の成功が、どれほどヴォルテールに影響を与え、ある点においてその文学的実践の軌道修正を促すに至ったのでしょうか。

まず第一に、ルソーが『新エロイーズ』のために選んだ多声的な書簡形式の影響にヴォルテールが驚嘆しなかったかどうかという問題について問うてみることができるでしょう。なるほど、書簡という形式は 18 世紀半ばには広く普及していました。ヴォルテール自身、大変多くの書簡を書き綴った人物で、おそらくはベルリンから戻った後の 1753–1754 年にかけて、すなわちルソーの小説が出版される前に、書簡体小説を着想していたと考えられます。その小説は完成されることはありませんでしたが、リチャードソンの小説同様、『パメラ』と題されるはずでした。しかし結局この小説は出版されませんでした。それは、美的原則のせいかもしれませんし、個人的な事情によるものかもしれません。これに対して、ヴォルテールは 1767–1768 年にかけて書簡体小説を執筆し、明らかに凡庸な作品であるのに出版しました——凡庸であることは、あらゆる同時代の批評家たち、ヴォルテールに完全に味方している批評家たちにも力説されたにもかかわらず。それは『アマベなどの手紙』です。このようなタイトルは、ヴォルテールの物語作品の中で唯一のもので、この著作が書簡形式であること強調していますが、さらに多くのエディションで誤って省略されている「など« etc. »」という略語からは作品が多声的構造であることまで浮き彫りにされています。私の仮説は、『アマベなどの手紙』において、ヴォルテールはルソーと対抗し、小説というジャンルを多声的書簡体小説へと向かわせる最新の強い動向——この動向の中では『危険な関係』は帰結点ではないにしろ、傑作と言えるでしょう——に加わろうとしたのではないかというものです。『新エロイーズ』と同じく、『アマベなどの手紙』は、2 人の感受性豊かな若者を結びつける深く忠実な愛、彼らの別離、友人や敵との関係を取り上げています。退屈な『新エロイーズ』を刺激的なものにすべく、ヴォルテールは自分の好きな題材、つまり異国的要素（2 人の若者はインド人です）、東洋の思想、反教権主義

的批判（2 人の迫害者は聖職者です）を織り交ぜています。しかし、こうした混合物には「爆発」の危険があり、ヴォルテールは若い作家と張り合う試みにおいて気楽に構えていたわけではありませんでした。そもそもそのことはこの物語が未完に終わっていることからも示唆されています――そのせいで、主人公たちの感情と運命はわからないままになっているのですが。

ルソーとの衝突後のヴォルテールの作品の中には、ヴォルテールがルソーと対立し、その文体を断罪しながらも、このジュネーヴ市民の作品の中で特に人気のあった幾つかの側面から影響を受けていることを示す要素がもう一つあります。ここで私が念頭に置いているのは、無垢と永遠普遍の幸福――『俗世人』に示されたものとは大きくかけ離れています――と結びつけられる田園についての記述です。こうした記述はヴォルテールの後期の作品に数多く見受けられます。これには、ルソーからの影響、より正確には『新エロイーズ』第 4 部からの影響が想定できます。この小説の第 4 部では、ジュリとその夫のヴォルマール氏が慈悲に富んだ自然と常に触れ合い、豊かに暮らしつつ平和に統治するクララランの領地の家父長的生活が描かれています。1762 年以前には、［ヴォルテールの作品には］自然の描写はほとんどなく、たいていの場合型通りのもので、とげとげしく感じることすらあります。例えば、『カンディード』最終シーンの哀れなさまの庭は、すっかりあきらめきった主人公たちそのものです。しかし、こうした自然描写は『新エロイーズ』の読書経験を経た後には数が増え、魅力的になります。『ジェニの物語』はその例です。ここでは、アメリカの田園地帯での主人公たちの出会いを描いた一節を引用するにとどめます。

> 私たちは道中、右手に非常に広大な住居を見つけました。それは背が低く、快適で清潔な邸宅で、広い納屋と広い家畜小屋にはさまれており、その周りをすっかり庭が囲んでいるのですが、そこにはその土地の果物が生育していました。この家屋敷は一人の老人のもので、私たちをその隠居地へと招いてくれました。（中略）この人は私たちを温かく迎え入

れ、新世界で作り得る限りのおいしい食事を出してくれました[20)]。

結　論

同時代人と批評家は特にヴォルテールとルソーを対立させる議論に夢中になりました。そしてこの議論はグローバル化によって特徴付けられる現代の文明においても今日性を失っていません。発展と環境を保護する簡素な生活という理想との間、普遍的社交性と個人主義的楽園に引きこもることとの間、止まることを知らぬ自由主義と計画経済国家の絶対権力との間、溢れんばかりの快楽と禁欲的で汚れなき生活との間、エリートの賞賛と平等主義の勝利との間で、いずれを選ぶべきなのかと躊躇します。こうした躊躇の念からわれわれはヴォルテールやルソーの後継者となるのです。しかし、彼らの作品を眺めてみると、2 人を結びつける関係性、そして彼らに豊かなインスピレーションを与えた共通の主題を認めることができるのです。ヴォルテールがルソーに影響を与えたのは、彼がルソーの（若い）父親になりえたからでしょう。そして、ルソーがヴォルテールに影響を与えたのは、彼が人々の心をとらえる力を持っており、年老いたヴォルテールに人々が自分に耳を傾けてくれなくなるのではないかという恐れを抱かせたからなのです。

（井上　櫻子　訳）

付記：この講演会は、小泉基金および文部科学省科学研究費補助金・基盤研究（C）（課題番号 17K02601）の助成を受けたものです。

20）*Ibid.*, p. 474.